

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-07

蝦夷随筆

氏隨筆

飛鳥隨筆

○江都より津路原三馬屋と云ふまで行程計百二十里以下
はくり初と云ふをねぢ(波)海す。一、東風と噴風、久古伝
東風はヤマトと云は、西一凡八九里あると云ふ。新傳は、波りわく
タツ。カケレホシラカシと云ふ。三流の瀬、船有り、波風は、くま
風ゆつた内ハ、さう切ひさし、噴風と云ふ、余あれども、沖に
風ゆつた内ハ、瀬に流されて、南部の沖、津路原を、向ひ
て、度々也、又、度々、乃、同々、瀬、ヨリ、と云有り、これ、列島の、列島
は、止ま、有、物、海、原、より、瀬、原、お、て、は、さ、り、又、波、と、云
は、す、り、及、よ、を、く、ま、ゆ、を、ハ、綿、絮、と、散、一、た、ら、し、く
ま、く、海、面、二、段、も、さ、く、又、ゆ、の、は、何、と、云、さ、る、を、さ、る、故、に、
強、き、す、及、さ、る、と、瀬、紀、り、さ、く、波、松、す、ゆ、の、さ、る、と、也

此處にてこそ松若乃西に別松若地也此後行渡りし潮の
らく海岸巖石多きなり常則に船を差まく破船
すもも也業内ありき船に引くも雲霧海に於て船依
り及之元文二年丁巳の瑞路は附晴大噴風中(余船せ)
あり洋中止乃霧中懸くうり白くたる引く霧を
引くことあり船中烟霧あり及之方船にやそ沖におれを
彼煙若此肉(余)へむとく々空乃若りも又えつ風
く強くて方船とさへ引れりこころと船ひりまにや
らで日も暮山を曇りていよく方船とわすれられ別
は西風吹む月の方もわすれり又り何れに於て也
別斗は此船の方島と云所へ若若引け方船をこころをの
きましく山の秋海の方と受くす方船と西風と云く

なり若を大に感て何れ方船と受くす方船と云く
若りしと云細く受りたり又又あるも此巖石
危云り何れと云く云と云と云りれを若と云と云
若り又引くも若り云と云風もよりて大に引けり
て海と云ての船体と暴風を云よ及り又雲霧と道
たす附被ぬ及り受也

○松若と蝦夷と一國と云云松若領と云云六十里 西
に熊石東に龜田此處あり一國而有是なり外ハ蝦夷
地と云所まで行来御改の邊にして蝦夷地に渡りて
林あり地ハ海をこくくあり山と負東西二里斗り家
はこくく南中ハ狭く城を屋敷作りて楮三有之
れ西にそあるの第宅也

家老 松前内記

下國齊宮

蛸崎内藏之丞

寺社奉行 二人

御定奉行 三人

○ 御下之祈言札有

空

一 役場廻松前渡海ノ事對蝦夷人並商賣等停止ノ事

一 女子細布松前(今渡海賣買は右有)ニ忍成之旨ト
しヨリ附リ蝦夷人ノ後継傳事何處ヲ為ランカ書ス

一 對蝦夷人附クニ後玉ヲ御受

右ノ條ノ可相傳ニ若於遠紀ノ族ト仕者並代々之判ノ有

速可有嚴科者也

寛文四年

御朱印

○ 本幕とのつりごとくわく〜の吉田流りぶねハ

北島ノ上 職ノ事々々ノ國臣ト爲ル所ト專ムルノ收御加四ノ
也刑科有之の地也 種々更云と 選取トシテ 免罪此沙汰
か〜是よりして 近幸ト他玉より 放棄多ク 若入也や
〜とて〜とあらはと 先所けく 竹島トなく〜と
て事傳反却之云著の之の 區懸ト〜も有り 城下
の高人トは別大隣ハ 備薩ノ村等乃 若多ク 加賀 薩也
おねさ乃とのこり 有ノ百此と 相成度此者 又此種南
越乃とのこり 高人と 皆旅人也 百此者 亦と 田代なく
難と云々 農事者 加十ノ一ト 爲テ 租税ト云 是 松前中
の 收御也 此 雜操 薩ノ海内 曾一ノ 大獲多ク 登一これハ
此 干部と 田土ト 用ト 所ト〜 南部 薩純 出 所ト 此 列
ノ 何〜 也ト 用ヒ〜 海内 二面ト 用也 教れり也 若 裁

乃よそを伴御ほどききと考て四角ある取子千石付く
江部(献上有)橋と云布して市と立敷のよ誠信相と
一話(考)の事一度大也されとも運上とてハれ
離一運上有元れぬ以要敷十百年不獲と云事
をく獲内らありつゝ松あふ年く年く内取と遠ハ
春今十月より寄来く九二十日布との内十三度考
来ると内獲とゆれハ翌年までの渡也是と流く離れ考
来く伏クキルと云ハ何々我身と初ねち中の有るハを
収めても上下一同う以考す初くくして田化の秋と果考
るひな一春より初り九二十日程ハ元江色て江
上十月中旬初り六月より又昆布十町り六月中旬
り昆布とそり江岸七月々上下一統ハ体ても多布ハ下

打込く踊有たよりも古風く流あたるる一奥將
乃渡くよりとも踊り色とも松あ村上とされ一冬終り道
路自中ありあるへ一八月はよりハ冷氣強くあり乃
ま九月ハ冬も降るやれ暑氣よありとて掻け用さ
家くよいとも考より是すくハ何乃事考も考考内
まくゆ一考れあつた

○蝦夷地廣大也松前地下西方々ソウヤと二百六十里東方
ハキイタワフと四百里と云陸境さあれとも云山と切て
乃海れく海と此里敷かれハ極く早敷とも云わ
東西海を繋訓さう船方此者とも云んやと二百
七八十里キイタワフと二百里中と云りとも有海一以東
西面所通ハ松前より商船以て交易ハ是より奥へ

相通はさる所なりゆきほきく帳夷も信居る村有り
松ヶ八郎、亦凡石六十里と云是と奥帳夷と云と一箇
の周廻凡八十と云然らず事、大概是れなり

○ 般通路有る事此帳夷ともハミ、松常乃百姓也此里
般此土地少領主乃鹿入の仰ハ、為種家臣の初り子別度
して土地も余化か、帳夷一村の酋長もて松を此令と
交て便帳と事、高人も迫帳夷乃、村にて信合
相成、運上と謂て帳夷と事、便帳ゆり、先
に獲物と他由、一、事、帳夷と、高人を
高人とおも、て、直、交易、高人も、相成、
運上と謂て、信場所、入、込、運上、令、別、武、家、乃
初り、收納、也、及、友、初り、カ、多、く、あ、と、石、板、乃

おりのれ

蝦夷産物

鷹

鷹羽 真羽カステ
空ハカ、ハシ

鶴

熊膽 エフリコ

鯨

昆布 ウロニア、取所、石、骨、キ、ラ
上、品、ト、ス、ニ、シ、リ、タ、下、品、ト、ス

鞋

干鞋、塩川、
越、キ、敷、子

熊皮

鹿皮 子、ツ、皮、ト、皮

串貝

煎海菜

干鱈

鯨 石、焼、カ、イ、鯨
軟、ク、テ

鯨油

椎茸

狸虎皮

是、東、海、に、現、虎、鳥、ア、リ、島、蝦、夷、キ、イ、タ、ク、東、ア、交、島、

猛犬膽

是、東、海、に、現、犬、ノ、入、江、ナ、リ、時、浮、東、ル、ク、帳、夷、

蝦夷錦

衣履に任じラルシマケト云巻物ヲキラント云多クハ古キレ也

アサラシ皮

虫草

此色有青玉多ク流ル此三品ハ西海ツクマノ産物也此年秋止也

北有ヨリ蝦夷ハ汝又物

米

八井ノ 酒二斗ノ

糶塩鍋出及糸

針タユ 古着 漆木綿 キセル

右之類也

○米々海陸秋田酒田より出ー沙領之も酒田田也是乃内之そにちあり後沙買積りあり時乃お湯を以て付合上納くそあり取入運上並有商人より而後へは返米せせさる石更知く浦首より米入込米込山より下野の者連也

○カテと食いもまこと三下

○國中東西乃方々山多く西より方々本内地方の地丈一山

岩石多しとして峯嶺スルドケ切之るるト高山此地頂

をましく金銀の氣味を硫黄此氣味を燒崩るる云地

子金氣多し其の能事より此類乳一といへり七十年以

あつて八年も砂金を採り松前領内よりハ仙見ヶ嶽ニリ

くわく布力も砂金場ハ松前領内よりハ仙見ヶ嶽ニリ

ウチ東聚英地までハクニイウニウチナリ昔は猪ノ場

取とも敷十里ノ後ノ場有るをハ此口是年海より

上ノ砂金也惣して餘事なり此も砂金を合山より流る

スル砂金もて俵列しても僅中なる也松前聚英地乃りハ山川を云々及於原野とて砂金有敢て合山より流

出すりし那の土に砂令氣充てせし是乃砂令が原也
とも古土一揆すすりし河原此令氣有所有(記)是原
是と尋斗り砂令場乃河原に令山有之証據相
似し理に見極き候と云り此化砂令を乃の候あり
て令氣の之を逐て窟中へ入る事とを和知候(記)是乃
令山と稱と云事ハるしと云り場なる跡を記すも
非又砂令を見りて塚を乃りて令石と曰ふ事場
のりしハれし是を銀山洞山等と稱又此の記し者
ともるく只ち於りて有斗り也此化源をハれし令を
ひも小判の通用は迫き以りは訓きとて今
砂令老の若目也

度長 小判一両 金七匁二分 金一匁 錢六百文

○石山より河原に砂令を採有る洞山を十字山及大山袴
山あり二十五年以前トモキもめて火をわし七日七夜燃せし是乃
山中より燒取しそりし後乃山山あり今も代わら
檜を燃しと云きとの、す、燃夷化へけても掃地敷
夷松とて一掃有檜と云ふは本と云くは有是又化由す
るは松也は乃飛譯を久き傳と云りの採高商人と云
夷地一面採本山と傳合ては部又坂(記)松乃ちりし
ちりし和部めと物と屋傳子曲物等と云り亦本目
ココロありて節あり檜よりも葉なり又大系松有燃夷
松よりハ品と云れり新基と云トロツラと云本有松
の枝と云桂檜朴ノ木黄蘗等多し竹葉等一葉竹
半也云此度大なるとも實、由りては氣物さし致茶

本禽獸異數電まで南画すはすれあはれおまへ
○ソウマの交易おし内流まを世有とカラフト島より持来
ると也カラフト島熱名をタライカと云周回三百里斗れ島
也此島南海のちを浅水を流れ如又瀬も深くと船
来りて一は島(西海より二尺はり斗の大芦又柳子
流寄を繋ぎとも取来と相お高人ともあつてゆり有り
けありり根更へ迫きおカラフトよりカラフトより根更地
シラスと云西(海と三里とも云シラスともソウマより陸傍也
けタライカイより四方よりなされてセタニ三十ワともあつ
て是山高麗と云り海まをま等とけ両より傍まをタラ
イカイれとも雨ふり高しりて常れ交易すつと也セ
タニ三十ワ若し文字中にも有人おしりて美酒タバコも有鐵額

いしの反錫釜出及のちを渡ひて也山田久住つとをねはソウマ
へりりておまをセタニ乃のちを牛り合けりよけ久住つ
とまを年繋ぎへ渡りお南海ともて更地切者らもつ
を所ををセタニの若くとも解今えげ者とも甚色
巻ねと云つと披て身へは大小の文字書文多くハ密字と
又えく枕字のとも又漢字も有てま字もあまり

本邦の三社此記のとも若くともて上中下三版は密字印
と押と有何と云るた物さう及ねお(海)て領まへ上(は)た
文字おらる(入)字も傍もあつて(味)有るれハ密字及知
うとく何ともいふれ難く右乃巻ねを領まへ(海)也

○ハロキや十里の砂浜也海屋より磯令上る是も熊皮に比れ
あさつり也は渡西(海)と云けたる化を春夏東南乃風

自ら彼も荒れ秋冬にわたり西風の荒れは彼清大洋より
押さるるは阿麻庵の砂金を降しけり也春夏ともも
大荒乃したる翌日ハ砂金有け候との命し西と傳て死
は入るる初めさゆ仲して破船れなるホ北渡(カキチ
そらその肉も見地知れも有又又再探もあらず有是
又石也知れも有あきハ吳宮より漂流の初めし一ハ松
よりハホロまで海上百六十里也け色よりソラヤと云山少
く卒末多し一人云ハ無くく山を東南と告しして西
山とほくそら不多しけ山を居よを所ハ西山卒使れ
地多く東南と悉く山とてまうも山峻嶺スルトキ
景氣もさハ山の松が玉れ海のものとなり然れとも
ハホロを極寒乃地より中く候居るべき地ハ北の草

本更(筆)を少き百友船乗ガミモ任せ凡僧く砂金をたけ
やを竜ぢい若も有あれとも多くハ字ハ丸もて死さる死
さるものハ松が(ゆりて)ゆらよまうして商人ハゆけり
○ 秘宗乃云ちハ大洋(漂流)くく方而を失ハ何さ(ゆら)も
至有る多あすハ阿の雲と云て是を根有てまら
中をとりヤウと云是と見出南し一云あうと必しわす山
島有とありハホロハ大洋(漂流)せし若の云ちりハ方とを
メバワラヤウ又ゆらり有りしもの云ちゆらと云ハ朝
鮮とも有(き)也又飛天(商人)の云ちりハホロハ朝鮮と
對してさ方而ゆれと云りハさ方(わ)りハこれと云う
はをきゆらりハ(わ)るハ三十年花憲廟の代朝鮮は官
人李仙達と云とのハホロ(漂流)者ハ友ハ商人ハ(運)建

まかり白都(辰述)有て、白都即今味老と標若と
而根原對馬(後)されぬ也。仍有て、白都より
沿邊往還乃同根あるべきなり。肉好_ニハ一毛_ノて、白都より
墨跡有て、白都乃若者、白都羊_ノて、白都より、
也又十年_ハ、白都乃根原(交易)に、白都より、白都高松暴風_ノ遠
朝鮮漂着せ、白都朝鮮_ニより、白都朝鮮(送り)の_ノて、白都朝鮮_ニ
色_ハ、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、
産物の、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、
若_シ、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、
也。根原_ニ、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、
石_ハ、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、

之林鎮有て、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、
館と云ふ處と云ふ所、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、
さ_ハ、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、
るか_ニ、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、
る_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、
根_ニて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、
か_ハ、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、
和_ハ、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、
此_ハ、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、
○ 余口_ハ、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、
川_ハ、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、
千_ハ、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、白都朝鮮_ニの_ノて、

此より先年、岩間と云所の蝦夷等、船にて降り、土
の信り、あれとも、土保、あれさりと云り、川面、千、蝦夷、住居
して、松方、高人も、仍、高、又、奥、蝦夷、エ、ウ、ツ、と、云、川、と、い、い、言、り
を、倍、せ、エ、河、也、河、を、千、蝦、夷、村、多、く、蝦、夷、地、と、云、夷、人
此、多、き、と、い、エ、ウ、ツ、を、一、と、す、と、い、一、ウ、と、云、大、河、此、事、
ア、イ、と、云、小、川、の、夷、云、也

○キイタツフを、海、高、取、を、居、れ、隔、り、て、獵、虎、し、け、所、と、て
交易、す、り、也、け、さ、高、多、一、所、謂、蝦、夷、乃、千、高、彼、大、洋、
以、て、ハ、何、種、高、取、有、と、云、事、と、云、松、前、(あ、さ、か、高、取、
三、十、七、門、と、云、大、嶋、也、す、く、れ、て、大、島、と、云、取、十、三、三、と、云、
也、高、取、十、三、三、蝦、夷、住、居、し、て、獵、虎、と、い、獵、虎、も、一、
島、と、云、獵、虎、と、蝦、夷、産、物、乃、最、多、と、云、也、と、云、高、取、蝦、夷、

キイタツフ(交易)と云、事、と、云、物、行、り、り、の、と、云、也、強、風、か、く
船、而、里、の、船、吹、あ、れ、れ、そ、り、一、内、街、高、と、云、け、て、船、と、云、
あり、一、と、云、高、の、と、云、男、女、の、及、お、も、れ、く、皆、一、腰、と、云、有、
者、の、修、師、と、云、さ、り、ふ、た、り、ひ、く、船、と、云、な、り、お、れ、ハ、文、母、備
(お、て、お、あ、る、と、云、お、れ、と、云、と、云、さ、り、と、云、わ、り、り、の、と、云、て、色
一、と、云、り、と、云、キ、イ、タ、ツ、フ、よ、り、ハ、水、千、高、と、云、と、云、又、五、高、
と、云、高、の、間、に、蝦、夷、有、て、毛、髮、偏、そ、う、蝦、夷、有、と、云、り

○キイタツフより、二十里、と、云、よ、り、ケ、キ、と、云、高、有、り、大、枝、と、云、
以、八、年、以、前、南、都、北、高、人、過、文、太、夫、と、云、者、知、く、高、ア、此、山
へ、一、と、枝、と、云、を、り、皆、帆、柱、と、云、用、を、り、以、内、ア、ウ、ケ、と、云、り、直
下、ア、ア、(と、云、者、波、地、明、の、指、右、向、を、云、我、馬、と、云、指、を、り、大
枝、を、と、云、さ、り、)と、云、今、千、船、と、云、有、と、云、い、を、高、大、洋、と、云、く

是道一と云り、弊を乃地改小より、高き、廣く、南郡の石
山より、西地より、接する、東海（七百里）おくる、地帯凡二百里
斗也、云人、お傳ふる、地、固、堅、壯、振、也、是、云、凡、も、有、金、銀、石、なり
本邦の地、固とし、と、微と、す、う、に、そ、く、所、る、は、有、産、腐、磨、の
西、玉、れ、温、り、仙、臺、を、事、也、乃、限、り、凡、鳥、年、も、不、及、然、く、し、
薩、才、の、伴、宗、乃、漢、松、と、仙、臺、令、花、山、沖、宗、の、使、松、と、事、諦
有、一、と、云、又、令、宗、山、（深、者、と、一、受、も、有、而、後、晴、天、乃、翔
房、州、の、山、より、幣、乃、以、以、海、向、山、見、ゆ、り、と、之、又、玩、球、今、仙、臺
（深、者、等、一、も、も、在、梅、敷、後、の、岫、鳥、と、り、ゆ、り、の、人、直、宗
必、昂、一、と、云、り、金、花、山、を、り、蝦、夷、シ、ヨ、ラ、嶽、れ、燒、く、師、音、雷
鳴、の、こ、と、道、く、軍、心、り、と、云、り、シ、ヨ、ラ、を、ア、ウ、ケ、シ、より、も、何、ノ
宗、道、一、と、云、ま、信、り、つ、ま、と、も、海、上、凡、里、數、ハ、遠、近、の、程、三、々、極

つ、と、一、地、受、宗、一、信、返、の、船、崎、も、も、何、く、と、れ、と、何、く、と、
斗、り、の、つ、た、る、を、何、を、一、信、と、と、西、海、ハ、宗、と、と、東、海、を、宗
船、と、西、海、を、倭、と、多、く、一、雲、霧、淺、一、と、云、れ、と、九、月
な、り、ハ、波、涛、荒、く、し、て、新、宗、東、海、を、倭、く、遠、く、て、宗、者
深、く、潮、養、一、方、地、を、迷、ハ、又、亦、南、風、吹、く、は、山、を、ツ、三、此、地
を、何、一、お、切、れ、大、波、有、ま、一、海、中、の、交、と、又、玉、潮、と、云、り、有、
大、洋、（宗、出、し、て、風、云、元、何、を、以、遊、一、つ、れ、と、云、り、）ハ、何、さ、り、
る、有、り、奥、島、ハ、宗、の、枝、本、松、乃、信、と、云、り、ハ、何、く、と、宗、一、歳、く、
醒、り、ま、さ、り、と、云、東、海、四、り、の、
亦、高、代、亦、地、本、筑、花、屋、
能、古、出、つ、と、云、者、お、勤、今、一、と、云、て、浦、田、田、宗、内、數、十、艘、玉、海
を、以、て、何、ノ、宗、す、れ、と、云、何、く、彼、松、立、り、數、十、艘、を、獲、れ、り、と、
を、以、て、何、ノ、宗、す、れ、と、云、り、玉、海、を、以、て、宗、一、と、云、一、西、風、吹、く、

雲者と吹拂ひ是等の風を紀及大隈系と云ふなり又天地
の氷と東流と云ふて西海を流へ向て東流と云ふ海を大伴
一陸りともかく東流ナク友との内より陸と新流と云ふ
きぬ也

- アウケルの島オクヌリノ嶽乃隸ナキ金山有てコロコ山と云
習者なり郡田群内をく是とをメハ合光オオ旭田ノ賦下
り一高祖のこのとも云りは是とコナと云西ノ砂合有く
心かとも云るなり有るなれハ金山有屋一松ともコロコ山を
すれとも合色ナク是と云ひ金山ともハ其傍にも金山
是とのまてともあり一と云けハ銅山中にも有る所也
○砂金と東蝦夷地ナク多一七十年以前ハクニイノ松前
砂合と云ふ人入込なるとも也合屋を云とてクニイノ松前

間有る事と云ふ事ニ記より砂合ハ其事ハ心蝦夷地ハ込
り別棟あるなり是を兵ナリ者もあ一今ともいふ所法
とて砂合と云ふハお屋ナク事ハ云ハイニハ云ハ云ハ云ハ
の類也一と別法者あるなり是を云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ
は別法と云ふ也其法云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ
いへりて數々これなり元文己年まで七十年也と云り
越して東蝦夷地別法ナクてやくもすれハ松前此令と云ハ
云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ
ト事也云々年と云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ
を云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ

- 東海ニヲキナと云更有益ナク何程と云ふとも不也難と云
と云り春夏も南と云く秋冬とも北海と云ハ東蝦夷地漢船

ともなくお命を是とあつり浮のぼるは稀也海を雷乃
とくは若くは波浪のくも也鯨鯨東西にぞう肉をキナ生れ
るゝおて漢和とも早く連降る也稀は海にさる所えんれ
大なる島に三つおまふりやくうも脊の辨あり一全體と
身くう若くは丸くと蝦夷去り又カキリと云実有鯨とこ
殺して喰ふ也を小実めく近敷去り有又キナホウと云
実を海雞実のてくして腹中を吐腸有蝦夷の音を也
キナホウの腹を割てアウラウタとれん代りイナライとて海に
一稀スナ死すりひ丸く死ぶる如くは腹内はイナライ
の宵キナホウ夜をたれてくる事有と云りイナライと云本
と削りけて松とすりこの地を海と云海乃てく交り
もつ実をト線を有きも春夏を雨おて秋より冬は海

稀とて地タライカイの沼に居て春と云おる脊ナ蛸の生
る有と云り大鯨の沖と波をナををくををを資はく
班くは更ゆりも蛸の生る地と云り鶴鶴鴻雁は春
虫一帯は蝦夷地深山の沼に生えても岩に生りて有
今度カ嶽の沼と盛田者も通り一は水もさる鴨多く居
れり一リハツシヨウの沼もをれ文多く有り也

○松若くは田代あき事一と云地を合さるるはあく田代
時に鯨鯨と云今度古来より耕種するの地也近來
稀終者多くウツへと云而(由斗)極有鯨一おしやと云
空く肥さる斗もて実のり久又老田と云而くは試りれ
とも一回のり久も稀終者多きことおしや又試りり
れ一おの隙をひあきと云為居たり若くは自らたれ友心

とすゝの...
 ねちのゆく...
 一田試て...
 一年試て...
 粟稗 蕎麥...
 中もて...
 湯気一町...

不省馬...
 右栗の太...
 六尺申れ...
 菊も有

○...
 方は据と...
 再此由...
 乙部...
 丙部...

奥州古奥山也々々（般わりの）下ははるる志田を以て
去地徑く三里斗の平地有富として百餘頃ありは是れ
山を尾之末くゆり也景勝渡河まじく也山を尾田より
三十里を東嶽夷地より白ヶ嶽と云山有他頂麓出でて白ヶ嶽
の如くは嶽なり麓より古光寺の跡地とて安置する嶽夷
と是とぞ致し不思及の奇蹟と有り云傳ふ東夷地
は彼東禁制されとも世に乃傍ら也ひてを名僧すは白ヶ
嶽の麓と又入はせ景勝より西を太田山と云白ヶ
嶽とて信心の希き者諸より少く一も悉くは山光光化
方は而ゆく抜群の言山と云を白ヶ嶽より六十里
奥よりニリハ山と云有富士山と直り村居をたてくあり
さ山と云とも男士山と十月して三ツは僧うへく一南郊

是て岩鷲山傳授して岩岫山ハ南郊は快活富をそ林ハ
秋葉とせり傳ふれとも云はる富士の三を二あり一ニリ
ハ山と云は山より傳せり一ありハ東夷中乃三山と云富のとも
とも云り世を願ふ中央の大山ハ仙見ヶ嶽と云ねちよりハ
里あり山と此嶽と傳ふ事十一と云く仙見ヶ嶽乃東夷中
ありハ池頂（せりとも傳ふ付ハ眼力に及ぶ正は云々）
南を南郊麓山より快活乃岩岫山西をケニ三ヶ嶽ラコ
ニリ海軍山也（あは箱籠也）修く群嶽（連）陽日ニラツテ
をくくハ松糸を直下ありてねたきとも是ゆり也是ねち
申は金銀山ハ根木也云り
志願此海時松並山領なく海島有して地形圖ニ云くハ
狩野祐甫云命をたてて守りしと云く又黄門光國師

振夷地此固田少凡のよめ大松とはして松あり毛熊あり
牛馬けり牛頭馬掃して可敷なり西振夷地ニテと云所
まて酒のけりるを林此事や及ハ海と所くくわくふ
物さるるまて酒のけりて清くくく地

○振夷海辺に位て山は位をかり奥掃と云く人漢人
加て山に位振夷を耕粟少者位り又獸と云て食しそ
彼と者人也して甘愛更位りく癡也又此位見つ屋き
存く奥に更扶して獸に著しき形あれとも心は實
ありそ衣食位は炊少く利倍の巧みきるなり(座)衣
布のつるも福又とて心平位せ家位を山より水ととり
飽そつりけ並居り一床をくして塔云向取を本位位
て處人より有衣をラニウと云本位位と云てメコシ

御り一毛と云と云メコシといか此方云也又獸位位と
若し背に位てり神ありを安若故てと云れさる應教
髪ありて冠りとのるく既足りて帯を人食おらゆ
より亦御夕と極くく食事あるく只晚食而已とく今也
形剃肩深眼髪髮長くく怒力毛れと云く事熊
のこ一何しの毛より習性さるや耳の毛をいたり別法
よえゆれともま力ありとのれしけりの人と角力を振り
腰より負く勝とのれしと云り腕と頸に力ありと云
き若れも額に南物してけり人負りりやくみく
けり男やらら然くも酒と好漢掃の獲わはるか是
7-1-1-1-1

○かを髪と切りて先の毛く色りりて耳かまて皆

○堀の橋東橋より上唐と云へ入雲十カ子云凡也唐を巴人
細のさのてく暮局のゆくりの形と云くよあきり仍
ふは文たきことタテはりありてアリスの上十常とて滞り
ままを障敷のゆくり連てぬらりとのと敷又こきとて丸
鑑十端と肩袖のゆくりはてはるはるやうきとて又十端
く御かきり甲斐とて又使の胃と敷端とて中々新と
てアリスと敷敷事とほとてて貞固也

○曾畑公秋の端と云くは但一れありてはるはる取親也
まへにそとそを而は有といへると云かりて因縁地と云
ぬ一節末を世とあき也そと他(カセク)のあふ若魚子あ
まご邑遊松ふそ布と又他邑(別)てを骨とる今松原の
願内へ飛走有きと云く乃飛走と云り(又)大方連と云

つれりとの所也

○は終南都とも飛走有云所不色といへる改を月代と也
利江方の中かりりて髪有は飛走と本邦改古よりれ
飛走してねち飛走と命とらりてをまへ至國と云く
そ別終南都と云く外と渡ウラと云ふ中は比帝と帝といふ
飛走夷中の巨壁也外と渡の崩長る大守といふ
とす之平一日過きりて二娘二人ありて琴を弾て歌曲と云
る飛走れ一ち也

○飛走村のを長と云と云本邦の産屋也ねちより令
とすとみ修て飛走と云はてはり知し海も春あき産屋を
ねちとせとてねちと云はれとつとしそ有物邑恐慎といふ
るねちねちと云はれとてちか(と)り体鳥(と)内といふと目と不

海内々外（石）酒盛まゝにして高ひ等も七尺程使也目
是れ何なりと鹿の皮等と石者本邦れ如多雲れ古を
若し弟とて又ラトと若すも有目之儀て極さる
酒を飲ひ又弟とまゝらふ如く（ゆ）て祝者有賜の酒を
中座に置常帯して如く又の後に坐し懸帯ととお對し
てまを指て祝言有如砂とれうと酒を盛るる人又飲と
客（勤）め客の礼容有鬯揚とくく常のこくをうお
飲は差さる碗の上よりとく程大酒と有百（）を指う
惚め（解）也たのまゆと碗と右れもあて鬯揚を酒
をりりたる碗と極（）鬯揚をゆゆけくた右り
ろ（ゆ）とよりかけ口を因て唱言を祝り授りて鬯揚
めく泉下の髭とよけ酒を飲碗二盃の酒をれハ二口二口

故本邦の陳茶香伴身て急夜惚と吞振りも碗とす
りてちりて飲干し又一杯受て鬯揚を載て之く（返）敬
夜もけれあぬれ酒醒り及て敬とく（ひ）ま（淨）福
理を授る音聲とて仏象の標名を唱す声のこく（）は女
子飲りて鬯有けたり又（）風流（）胸をもちて抄
又多とちてく（）と（）乃（）と（）有（）の（）と（）さ
そ（）御（）と（）と（）也（）船（）の（）啼（）声（）と（）れ（）拍（）子（）と（）あ（）ら（）る（）
と（）争（）ふ（）入（）而（）ふ（）さ（）能（）あ（）れ（）と（）本（）邦（）の（）之（）の（）又（）て（）又（）て（）石（）福
公（）淨（）福（）也（）仙（）臺（）淨（）福（）乃（）声（）して（）長（）ハ（）ヤ（）メ（）の（）而（）て（）
声（）と（）張（）き（）先（）と（）け（）る（）有（）一（）杯（）の（）酒（）を（）れ（）吞（）そ（）と（）別（）と（）
者（）も（）あ（）る（）只（）吞（）ま（）の（）む（）中（）也（）同（）又（）何（）と（）く（）ら（）い（）何（）と（）く（）ら（）い（）
高（）い（）と（）す（）か（）也（）を（）振（）其（）年（）々（）也（）あ（）ら（）る（）飲（）進（）振（）其（）れ（）と（）

春毎午を己午に於て執事五人招き酒を飲せり。其
 飲をうけていかりをうけてこれを酒と過劍を尋ねられ、
 此れは彼れあつてんが爲き山(上)の彼の酒開くと云所
 を今(一)と云く、
 一人を島島の羽一尾一人をカイメラ一歌(一)持来り連之と
 八平(一)持来り、是れを執事松本(一)より百二十字、東シラ
 ライと云ふの者にて春とシラコカシカヨ云り名を尋ね、事
 之れは、
 彼れも事也、二人を御味方、蝦夷と唱へてねあり、功有之
 のを、
 者との子孫と云り
 神佛をく醫藥をく文字れ、只酒と飲時と云(一)云有、

彼れの中、
 と尋ねれ、
 さふり、
 とい何と、
 酒を、
 (一)酒と、
 元氏、
 時、
 又、

とは幾世にても暴風は遙か遠はれりりと云ふを化の
 りたり又或筆記に東嶽更シルと云ふ一と書信社
 有く今不池祭の頃の概史と云ふ及信村に概
 史と宗敷を云ふと云ふの附の前者ラニシも剛化の概史
 也と云う所の概史中一と敬て知るとの概一ラニシがわい西ハ
 カルと云ふ山中岩窟有く古(仙人住たりと云傳へる
 所とあれとも義記乃社としてをわいと云うクルハカルの同
 遠方今一西嶽更化一六条の同と云う辨慶時と
 云所とも或記は西より中も藤(傳りあはとも云り是
 と云ふこととあるはも傳の事と史と云うキクルことと云
 り是々傳る程其有方ものと云ふは傳多段の根元ぬ
 何してゆりゆめりる是は文句と根は大事可いなり此と云

夷語ナリ通キ通詞をなく又文字ありといふは物毎
 化傳すは繩と傳へて或を其一刻とつけ在心意と云
 何年とてはげぬ是らり。云ひの概一高松懸栗地(一
 なく初芝の入事あれを化傳へるは繩と割有本と
 云丸のりて去年の事と需り世すは傳繩のゆる又
 一お是よとてのこたの物と云ふもトキ事有一村の者
 云は是繩と云て是と云ふ又一又遠れ一又云り云る
 一も禽獸と云うと云う射と云ふも茶芥の中と傳る旬旬
 にはるし一禽獸あるの概一醫者あるは鹿鹿鹿鹿
 所獲あると云う死亡の概史きくは物と傳と死と云ふ思
 伝者所れは父は是青と云ふと云う於て山中(遠れ死
 後ある死者の云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

包山守「送り紙落き」とのふも所落し包て同裏きり
 裏は燒け又改ゆりて形とり反り此事ふれは此の用さ
 らし心をもも也死利乃毒ハ冠り物として而てれサる
 る教事又毒ハ焼きハ燒いて死ハ真実ナリて燒成比
 急なく更ハ燒け及毒ハ燒けり報責の男ハて身工
 堅ハ此の種ハ毒多く巧くり如芳み人有れは
 死ハ所ナリ形ハ一事有るおとら打さくともく
 史と願けてほさ命も睡りともり産れ時ハ自身乃
 死ハ身ハ入りて死ハ身ハ出ス氣はくと様ハお毒
 一毒ハ海へ入るを死ハ又修くそのとをすさは
 如芳て血は強くるるるるさ修りハ死ハ死ハ
 ○男の道具をさる毒芳りの長ハ死人斗ヲコと云り

本の幹と丸削り、染々度蔓の心と合て用の法り、
 微力の者ハ引ハ矢と云ハ此矢行ハ虫眼と二眼ツハ、
 是眼ハ其を削て用ぬ又石を磨きとも用ハ融ハ毒を
 ぬハ其命断と耐ハ千タノフ事なく申タハ、
 外放原ハ、事なく申ハ加也大方は信命ハ、
 匹者て救也融ハ及命をなく死リ、
 方より死ハ、
 化ハ、
 一自然と到ハ、
 一と投突ハ、
 一とマヌ、
 一と也、
 一と也、

をかく裏の咽(どり)けぬ。川邊に門を度々と急流(あせ)け
て日かすれりら多く破れれど経ちく有反(あし)も他(た)物(もの)
さ事(こと)も明(あ)く又(また)すしや山(やま)口の松(まつ)りや松(まつ)
常(と)り^{いかに}成(な)り飾(かざ)り金(かね)也(なり)エテシ(は)燃(も)え加(か)すくいづ
らうと海(うみ)也(なり)銀(ぎん)の夕(ゆふ)き而(しか)れ大(おほ)き銀(ぎん)借(か)りよく新(あらた)き事(こと)
かとの明(あ)る有(あ)り口(くち)も八九寸(せうじゆ)半(はん)有(あ)り赤(あか)錆(さび)はぬく有(あ)り中(ちゆう)
害(がい)のりるき度(た)りと唐(たう)のりるく害(がい)也(なり)して松(まつ)のりる
斗(た)也(なり)又(また)云(い)ふおさ長(なが)り一(いち)天(てん)半(はん)の松(まつ)七(しち)寸(すん)此(こゝ)同(どう)く法(はふ)
は打(う)たりぬ也(なり)而(しか)れ此(こゝ)例(れい)のやぐ知(ち)事(こと)より抄(しょう)古(こ)の打(う)
すのいふん打(う)たり者(もの)は身(み)互(あひ)互(あひ)なり松(まつ)古(こ)をくしてをくぬ^ま
り也(なり)打(う)たりて其(その)中(なかに)修(しゆ)練(れん)也(なり)而(しか)れ是(こゝ)用(もち)ゆる事(こと)を擗(ぢ)吸(す)
有(あ)り付(つ)果(ぐ)の松(まつ)りる^り乃(す)乃(す)乃(す)樹(じゆ)松(まつ)のりる^りと和(わ)法(はふ)

一のき恨(うらみ)なるる互(あひ)互(あひ)打(う)て白(しろ)く血(ち)をのみあきや也(なり)
又(また)此(こゝ)有(あ)りものとも打(う)たり又(また)力(ちから)打(う)たり云(い)ふも有(あ)り山(やま)谷(や)海(うみ)
よく核(わ)死(し)なり者(もの)は一(いち)粒(つぶ)集(あ)り位(くらい)多(おほ)く入(い)りてマキとんといふ
一(いち)打(う)たり打(う)て血(ち)をえて是(こゝ)と帶(た)すとす^{こと}マキりといふは此(こゝ)の
○毒(どく)箭(や)箭(や)用(もち)ゆる毒(どく)の事(こと)松(まつ)葉(は)すくも者(もの)か^り高(たか)松(まつ)は者(もの)
を身(み)に付(つ)き^りて帰(かへ)る^りこと炭(すす)灰(か)いと訓(しん)深(ふか)く^りあふも
も毒(どく)此(こゝ)事(こと)を問(と)けども教(くわ)へいゆもなとクマシカして問(と)く
といふ事(こと)あきくと炭(すす)灰(か)一月(いちげつ)のまじりといふくすり毒(どく)と合(あ)
てり^り二(に)回(かい)も是(こゝ)のたかりて調(しら)合(あ)ふ毒(どく)の利(り)池(い)とた先(ま)に
是(こゝ)のくすり^りと毒(どく)と事(こと)を問(と)けい^り古(こ)のくすり^り事(こと)毒(どく)
も是(こゝ)を問(と)けい^り毒(どく)は此(こゝ)のくすり^り又(また)煙(えん)葉(は)すく^り大(おほ)く^り
事(こと)之(こゝ)古(こ)れ^りと毒(どく)く^り氣(き)は^り遠(とほ)く^りと弱(じやく)き^りと名(な)か^り也(なり)

也。酒で之を治す。其小口をひく。あまの丹。其。多と解也。此。附
毒。烟合の。其。ひ。合。多。者。者。一。一。一。何。其。其。其。一。一。一。其。
之。德。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
老。人。如。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
入。事。其。也。然。と。と。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
落。一。
て。之。と。入。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
そ。の。附。之。人。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
馬。と。其。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
四。五。一。
之。の。と。れ。く。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
奇。毒。也。又。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

金。千。年。毒。翁。前。と。は。り。竹。籠。一。隣。と。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
之。と。中。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
挿。一。
を。小。然。と。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
其。一。
都。と。一。
馬。の。左。右。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
一。二。人。又。竹。籠。を。持。て。居。る。と。言。ふ。附。左。右。より。脱。履。一。一。一。
竹。籠。と。実。地。と。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
を。依。り。て。雨。は。も。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
り。り。一。
と。一。

すくおちりし妻り然ればとるすし長き九尺有りま
その事をもとて又又尺も有る

○寶物としてまゝに秘藏しお育深く徳しそ女子及中
しし初を以て前月より未附しむ者有る山中に隠し置
也とてわすれし古き書物又鈔目貫小柄の紙に所縁
の古きとのより秘藏せり數更の法と記し不有有り
罪の償いしと宝物と名をこめて相違し謝し置れば
そよりよりと宝物の教に傍觀をせしと宝物二十と云
所てさし二刀とおしと小柄ありとありて二十れぬし入也
い償いしとより諸友強て争奪のるれくおのれむつ
しとありてねおし強てひくと受ふ事ハれし世に重罪
賣家眼を今とるしと之を報更しては初より所のあり

仇友の二致内肉の乱遊ては列よりねおし強て産業ある
○月や海浜と明く數更(波)一産れと交易しと(波)世
とせしとる奥數更し強りざるを高紙りて捜求重宝
をしと又ゆ(道)數更(高)紙りしとを強りざるのれ
山中の數更しといしと強りしと有と有りたりねおし
一向分はり

○驚を樂ととりてたてと是より入相垂尾をきて交易し然
もこれ内よりと相違本邦の箱のゆくまを訓女居の乳を吞
せと育しと祭の附是と殺して喰ふ事と十月下旬は乃
惠比須講付しと也一乳を吞と酒を飲内にお樂しいハ箱
をしとるそりるこの腹を吞し及身と腐りてととハ箱
傾おまる進を殺し又粟米とと禮とととととととと

○松平直正と領地たるころの内代を奥羽戦役の擾亂
に隨て已て割讓して後藤を以て首領とせしむるに松
平は、松平直正と堀崎直政有今の上州山崎居座り、
松平直正と堀崎直政を以て兩雄あはれと、戦争止むるに
松平直正と堀崎直政を以て兩雄あはれと、戦争止むるに
の乱とされて松平直正と堀崎直政を以て兩雄あはれと、
英雄を以てあり、堀崎直政は、松平直正を以て、
幕下とし、松平直正を以て、松平直正を以て、
一、上州山崎居座り、松平直正を以て、松平直正を以て、
松平直正と堀崎直政を以て、松平直正を以て、
と、松平直正と堀崎直政を以て、松平直正を以て、

○松平直正と領地たるころの内代を奥羽戦役の擾亂
に隨て已て割讓して後藤を以て首領とせしむるに松
平は、松平直正と堀崎直政有今の上州山崎居座り、
松平直正と堀崎直政を以て兩雄あはれと、戦争止むるに
松平直正と堀崎直政を以て兩雄あはれと、戦争止むるに
の乱とされて松平直正と堀崎直政を以て兩雄あはれと、
英雄を以てあり、堀崎直政は、松平直正を以て、
幕下とし、松平直正を以て、松平直正を以て、
一、上州山崎居座り、松平直正を以て、松平直正を以て、
松平直正と堀崎直政を以て、松平直正を以て、
と、松平直正と堀崎直政を以て、松平直正を以て、

○ 掛りて利倍と云ふを以て神に上りて凡有治平而年
の倍と云ふ者倍増長して士大夫亦船一諸民皆手懸きり
古今の男ひを以て其の用令るの運き及ぶ也凡倍數倍
一々衰弊のキリハれ然るに山海の利澤民も及ぶ
古く今と云ふあれは世を減くしりて古砂金
盛なりし時他邦の者も多く以て返來て地へ引く
以て砂金と採運工領之奉迎て月一人砂金を五兩
也二支の運工を新りりりなれと數百人より納るる
集るの田を以て其の流席四支投りて砂金と其集る
る山山のそく砂金集りけり地帳を以て納るる砂金と
三十分の一にして砂金一兩に利潤とあり奉りて不可
言と云ふ其の亂と元文丁巳年ヨリ七十年以前の事なり

○ これも砂金の運とありと云ふを以て今領を以て收納とあり所
もかりとせよと文概とす

○ 古金十二百兩程 山積木運上

○ 同十七百兩程 雜運上

○ 同十二百兩程 高船運上

○ 同十七百兩程 蝦夷地秋運上

○ 同三百兩程 同夏運上

○ 同百兩程 昆布運上

○ 同十四百兩程 他國人役金

○ 此等如年貢入帳高取運上等被細のりて累代
も亦一紙多し所同のりて屋きり有るは其
○ 此等如年貢入帳高取運上等被細のりて累代
も亦一紙多し所同のりて屋きり有るは其

の海道ニバク、妻一十載の存遠有といふ。大抵遠くあり、
れ一里敷又合り今十仙卷領を六町をひく。聖と一
て二十六町を以て一里とせしが古の數斐尤今も森谷は本
のてく又玉の房備とありり山同すて開墾して六枚豊
鏡十海辺に潮と旋誤穢と一山よりて抄と一高松に鏡
返地さるゆはゆは是と云えり。後木后稷のり以
るもこの省く數年比も奥羽とありり有り。

三河後風土記

天正十九年九戸修理亮政実一揆の時
神君れ御陣に從ふ國士、八南都大勝る又信直津經中守
位牧松井志大守と云ふ志大守と毒笈と射と
お夷人がく召連来る。その斬を異形也身の毛大に長

して頗る牛は是をく似せりと改て高。胡麻と櫛は
さひ彼夷人の齒とて。夫を蝕す中、れとてのりかくを
と爲すの祟も不死若とありりけりト云ふ。
史に又のり正是等と初とある。一は先有公より
朱印と給りけり。一統の存、亦代、御朱印頂戴有
亦文言の篇

定

- 一 延諸國松浦は出入り者大石相記志大守、夷人今直高愛
- 一 延支のわ曲事あり
- 一 志大守を海邊に令渡海賣買はり者急なと改り
- 一 阿夷人、其も何方、假まらたの夷人公事
- 一 延更北、中御者、信、ゆ、事

右傳若格遠宵の華のくくくの歳科も也仍存

孝長九年正月廿七日

御朱印入

御文云同前

右傳若格遠宵の華のくくくの歳科も也仍存

御朱印

御文云同前

右傳若格遠宵の華のくくくの歳科も也仍存

寛永十一年六月二日

御朱印

寛

一從諸國松若海海の累為夷人直高愛徳信牛のり

一筆の細多相若令傍海愛徳仁右有るくくく可存を

附、數夷人、手紙付在何れこのわを句呼言

一、若、數夷人、非、く、手、紙、付、在、何、れ、の、わ、を、句、呼、言、

右傳若格遠宵の華のくくくの歳科も也仍存

寛文四年四月廿日

御朱印

2

1. The first part of the book is devoted to a general
description of the country and its inhabitants.
The author describes the various tribes and
their customs and manners. He also mentions
the different languages spoken in the country.
The second part of the book is devoted to a
description of the natural history of the country.
The author describes the various plants and
animals which are found in the country. He
also mentions the different minerals which are
found in the country.

